

要旨

本論文の目的は台湾文学を通して、日台間の異文化接触後の現象を研究するにある。まず第一章は序論で、本論文の研究動機と目的、研究方法と内容、さらに先行研究の概況等を説明する。

第二章「詩社の日台文人の唱和」では、日本が台湾を殖民統治する前から台湾に数多く存在した詩社について考察する。詩社の活動内容は主に中国の伝統文学の一つである漢詩の創作を行うことであったが、日本の台湾統治時代に來台した日本人の中には漢学の素養を持つ者が多く、台湾で日本人だけの詩社や、漢民族と共同の詩社を組織して、漢詩をつくった。

日本の台湾統治以前に漢詩を作ることができた台湾人の文化人は、多くが教育を受けた地方の指導層であった。日本の殖民地当局は文化人による反発を政府への助力に変えようと、1909年に「瀛社」を創設した。総督府の政策に従う瀛社の成立後、詩作を奨励する風潮が生まれ、各種歓迎会が開かれて各地の有力者を招待し、詩作を掲載するなど、台湾全島で詩社の設立が奨励された。

詩社の目的は総督府が文化人を支配下に入れることにあり、作品には「漢体和魂」が現れている。日中戦争の勃発以後、皇民化政策の下で、表面上は漢文が禁止されたものの、徹底されたわけではなかった。それゆえ、詩社の活動は盛んではなかったものの、中断されることもなかった。

第三章「台湾新文学運動の興新と発展」では、一般に台湾新文学が包括するとされる、伝統文学とは異なる形式、文化啓蒙、反殖民統治の意識、現代性、あるいは土地や民衆などを主に考察した。このような意義を持つ台湾新文学は、一般には1920年『台湾青年』の創刊から始まり、中でも陳炳が創刊号で旧文学を批評し、白話文を奨励するなど、新旧文学の論戦が始まった。これらの運動の一部は大正デモクラシーや中国の新文化運動や、読書の普及等によるものであった。

台湾で新文学が叫ばれるようになってから、1924年に北京留学した張我軍が、一郎というペンネームで『台湾民報』に次々と発表したことで「糟糕的台湾文学界」が、新たな新旧文学の論争に火をつけた。1926年には新旧文学論争は次第に下火になり、やがてそれが一段落すると、文字改革を主とする新文学運動が漢文の白話文学が確立された。

新文学運動は1930年代に入ると郷土文学論争へと発展した。黄石輝が1930年に『伍人報』で「為什麼不提倡郷土文学（なぜに郷土文学を提唱されないか）」これは郷土文学論争の幕開けとなった。1931年には郭秋生が黄石輝の概念を拡張して「台湾話文」を正式に掲げ、台湾話文による創作で論争が繰り広げられた。論争の中で、黄石輝、郭秋生、頼和、莊垂勝等の台湾話文派、廖毓文、林克夫、朱点人、頼明弘等の中国白話文派、さらに日本語で台湾文学を確立すべきだとする呉坤煌、劉捷らの一派や、張深切等の中立派もあった。ここで台湾新文学の言語や、いかに台湾文学を位置づけるかなどの問題が議論された。こうして次第に「本土論述」が現れると、成熟した「台湾」主体意識が生まれた。

第四章「皇民化時期の台湾新文学」では、台湾人作家の文学活動の組織として、郷土文学の論戦が1934年に、理念の異なる各派が台湾文芸連盟を組織した。その機関誌は『台湾文芸』と命名されたが、1936年に同連盟は解散、雑誌は停刊となった。この間に楊陸が連盟を脱退して『台湾新文学』を組織し、発行したが、これも1937年に日本政府の皇民化政策遂行のために活動を停止した。

皇民化体制下で、漢文が廃止され、漢文白話文の文学はなくなったが、これにより台湾人作家による日本語作品が大量に出現し、皇民化政策は成功するかに見えた。ただ漢詩は日本語の作品でも用いられたため、いくらかその形を残すことになった。皇民化政策の1939年には、日台の作家が台湾文芸家協会を共同で設立し、黄得時や西川満を始めとする準備委員らが、機関誌を『文芸台湾』と名づけた。だが同協会結成後、台湾人作家の張文環らは地方文化振興という名の下に1941年、啓文社を結成し、『台湾文学』を発行した。

皇民化政策の下で殖民地当局は文学活動のコントロールを一層強化し、1941年には皇民奉公会を設立した。奉公会の指導により、1942年に台湾文芸家協会の組織改革が行われ、台湾文学史を編纂するという任務が与えられた。1943年になると、台湾文学奉公会が設立され、文芸による精神運動という任務が与えられた。同年には「台湾決戦文学会議」が開かれ、席上で西川満が文芸家協会の『文芸台湾』を提供を提案、1944年に『文芸台湾』が張文環の『台湾文学』が合体して台湾文学奉公会発行『台湾文芸』となった。

「皇民化運動」の時期の台湾人作家の作品は主に日本語による創作であった。自発的に国策に即したものや、強制された文学作品も生まれた。その一方で、反殖民統治的の作家が台湾の現実の生活の特色を取り上げたことは意義深い。

キーワード：

異文化理解、多文化共生、詩社、漢詩、漢体和魂、台湾新文学運動、新旧文学論争、台湾話文論争、郷土文学論争、皇民化、皇民文学、糞リアリズム